はじめに

ベトナムの現代史は不連続の歴史である。

ディエン・ビエン・フーの勝利は土地改革の失敗に、土着性を売り物にした南ベトナム解放民族戦線は北ベトナムの硬直した官僚制に、ベトナム戦争の勝利と国土の統一は、ボート・ピープルとカンボジア侵略に、そして計画経済の破綻は今また「ドイモイ」による躍進に、コメコンへの加盟は世界市場への参加というように、栄光と悲惨、衰退と勃興とがくっきりと互いに断絶した姿で立ち現われている。

ベトナム戦争の栄光を語って、ボート・ピープルの悲惨を邪悪な帝国主義や反動派のせいにするわけにはいかない。それもこれも同じベトナムが描いた現代史の軌跡なのである。

ベトナム現代史が書かれるとすれば、過去との連続を回復させる必要がある。だがこれは言うは易く行なうに難い事業である。一九六〇年代から七〇年代初めにかけてのベトナム戦争をどのように描くかという難問があるからである。本書ではその難問を一時脇に置き、一九七五年の南北統一からの二〇年のベトナムの歩みを、生起した事件、発動された政策に即して語ろうと試みた。いまだ歴史のカテゴリーに入りそうにもない直近の二〇年を語ることは、「目撃者の証言」と言えるかもしれない。他に幾つもの異なった証言がなされることも、また未発表の文書が公開

されることも当然予想している。

ここ二〇年のベトナムの有為転変はまことに大きい。ベトナムは今日、ドイモイによって国際的孤立、経済破綻の深淵から不死鳥のように甦った。世界はベトナム人の「やる気」に、また経済的ポテンシャルに期待し、そこでの市場経済化の実験に注目している。

本書が語ろうとするのは、悲惨から栄光への過程で、ベトナム共産党と政府が政治、経済、外交の三分野で具体的にどのような政策を実施したのか、それは成功したのか、挫折したのか、そして今日全体として成功をもたらしたドイモイの推進力は何であったかである。対象とする二〇年の理解に資するために序章をもうけ、一九三〇年のベトナム共産党の成立から統一までの四五年間の歴史を要約した。

それぞれの時期区分を政治、経済、外交の三分野から分析し、叙述する形式をとったが、これらの分野がどのように関連し合っているのか、また三分野が織りなす全体としての歩みをどれだけ語ることができたかは、読者の判断に待つほかはない。